その人がらにも似ず、奇特に覺え侍るは、源義經の妾靜が事にて候、〇略中かの草も木もなびきし威に惕れず、勢に屈せず、始終志をたてゝ、義經に負かざりし事、高館にて殉死せし輩とも並稱すべし、ちかきころ京師の醇儒中村惕齋が撰びしとかやいふ倭漢貞烈の女を載し、姫鏡と題せし書に、是をいひ殘しけるこそ遺恨なれ、是は靜娼家に生れて、出所たゞしからざる故なるべし、それはさる事なれども、名敎を裨くるためには、是等をもすつまじき事と、翁〇室鳩巢はかねて思ひし程に、今更も申つるぞかし、

〔吾妻鏡七〕文治三年七月十八日丁巳、仁田四郎忠常妻、參二豆州三島社一、而洪水之間、掉二扁舟一、浮二江尻渡戸一之處、逆浪覆レ船、同船男女、皆以入二水底一、然而各希有兮存命、忠常妻一人沒畢云云、是信力强盛者也、自二幼稚之昔一、至二長大之今一、每月不レ闕詣二當社之處一、去正月比、夫重病危急之時、此女捧二願書於彼社壇一云、縮二妻之命一、令レ救二忠常一、給云云、若明神納二受其誓願一、兮令レ轉歟、志之所レ之、爲二貞女之由一、在二時口遊矣、

〔吾妻鏡十三〕建久四年六月十八日癸丑、故曾我十郎妾、大磯虎、雖レ不二除髮一、著二黑衣袈裟一、迎二亡夫三七日忌辰、於二筥根山別當行實坊修二佛事一、捧二和字諷誦文一、引二葦毛馬一疋、爲二唱導施物等一、件馬者祐成最期所レ與レ虎也、則今日遂二出家一、赴二信濃國善光寺一、時年十九歲也、見聞緇素莫レ不レ拭二悲涙一云云、

〔太平記十一〕金剛山寄手等被レ誅事附佐介貞俊事

佐介左京亮貞俊、〇略中閑ニ首ヲゾ打セケル、〇略中聖形見ノ刀ト、貞俊ガ最期ノ時、著タリケル小袖トヲ持テ、急鎌倉ヘ下、彼女房ヲ尋出シ、是ヲ與ヘケレバ、妻室聞モアヘズ、只涙ノ床ニ臥沈テ、悲ニ堪兼タル氣色ニ見ヘケルガ、側ナル硯ヲ引寄テ、形見ノ小袖ノ妻ニ、

誰見ヨト信ヲ人ノ留メケン堪テ有ベキ命ナラヌニ、ト書付、記念ノ小袖ヲ引カヅキ、其刀ヲ胸ニツキ立テ、忽ニハカナク成ニケリ、

〔陰德太平記三〕香川已斐討死之事